

日々の思ひ



すいそう

古代文化と 大沼高校

高橋政俊



朝日に輝く会津盆地の西の衆山は、四季の移り変わりとともにさまざまな色彩を見せてくれる。壯嚴な山並みと広々とした田園風景の微妙な色合いは、毎日これを眺め味わう者のみが知る天の恵みであろう。

朝、車に乗つて四十分が経過する頃、前方遙か、こんもりと茂った森が見えてくる。既に一面朝日に包まれ、多くの御神木に囲まれた「伊佐須美神社」である。祭神は伊弉諾（いざなぎ）のみ

こと）。伊弉諾（いざなみのみこと）の二神と会津風土記では云々てある。元は町の西南にある明神嶽に鎮座していたが、五五二年（貴樂元年）にこの所に遷し祭られたという。

私の勤める大沼高校校歌に「神代はあるけきいにしえの伊佐須美の森を日々に見て……」と歌われ、逍遙歌では「会津伊佐須美花の森……」、「あれは磐梯よあれは明神よ……」などと歌われている。明神嶽も伊佐須美神社も、共に地域の人々には崇拝され、親しまれてきた証である。特にこの神社は豊臣秀吉や代々の会津城主からも深く尊敬され、手厚く保護されてきた記録も残っている。年間を通し祭事も多く、宝物も多数残っている。

この神社の南側を東から西へ。更に南から北へと半周して進んで行く。「文珠堂」（一三三九年造創）が道路を挟んで位置している。

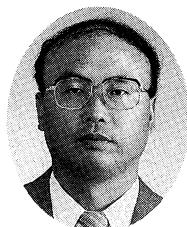
いる。

ここから数百メートル北に大沼高校がある。「誠実・明朗・健康」を校訓に、全校生徒八百余名が日々勤しんでいる。本校は特に地域の方々の篤い願いにより創設され、育てられ、護られて今日に至っていると聞いている。地域の人達の本校に寄せる期待や関心は想像を越えて大きいものがある。折りに触れ、膚でこれを感じる時、自分の仕事の尊さや責任感が身に染みて感じられてくる。惰性に流されることなく日々を過ごし、仕事を続けられることは、暖かい地域の方々や伊佐須美神社の神々・文殊菩薩等々の御加護なのかかもしれないと思う昨今である。

会津高田町の各地區から出土する縄文前期の土器は五千年以上も前のものといわれている。故に会津高田町は会津文化発祥の地ともいわれている。

思い出のことどもたち

花見剛



私が初めて赴任したのは、飯豊連峰のふもと〇小学校Y分校である。昭和四十五年四月、トラックの荷台に生活用品を積み赴任地へ向かつた。まばらに見える人家もいつのまにかに途絶え、周りは山また山。しばらくして狭い道

路の前に何人かの子どもが……。はじめ離れていた子どもたちが「先生荷物持つよ」と言葉をかけてくれる。手伝いにきてくれたのだった。「学校は?」「村は?」と心配になつて聞くと前の山をさして、この峠の裏だ

一日の勤務が終わり、田園に広がるホップ・薬用にんじん・葉たぼこ・高田梅・リンゴ・会津みしらず柿・ブルーンの木々等を眺めながら、朝来た道を戻つて行く。途中、さまざま思いに駆られながら……。龍興寺の国宝「一字蓮台華経」をどんな思いで紺紙に金文字の筆を走らせたのであろう。